

ことで、より固定感が増し、良肢位の保持が可能となった。素材に選んだリップル綿は、綿100%で表面が凸凹に加工されている。べたつきもなく、吸湿性・乾燥も良く素材に適していると考える。今回は緑茶の消臭・吸湿性作用をみるために、湿潤・臭い・浮腫・不快感の4項目について定期的に観察をした。湿潤において6名中6名が装着時に比べ数日後の観察では、ほとんど湿潤がみられなくなっていた。さらに、緑茶の吸湿性をみるために使用中の緑茶の重さを3日毎に測定した。15日間で3〜7gの茶葉の重さの増量があった。以上のことから手掌内の湿潤を軽減させ乾燥効果を得ることができ皮膚炎予防が

できると考えられる。看護師からは「手の中が臭くなくなった」などの消臭効果に対する意見と、「室内に入るとお茶の香りがし癒される」というアロマセラピー効果についての意見が多かった。安全面においても、間違っても口にしても身体への影響は少ないと考えられる。

V. おわりに

今回、「にぎ茶っ手」を考案・作製・使用することで手掌の乾燥・消臭が得られ、皮膚炎を予防することができた。今後は化学的な検証も検討し、「にぎ茶っ手」の改良を重ねていくことが課題である。

看護提供方式変更後の意識調査

救命救急センター病棟 ○田上全子 真貝俊枝
名倉やよい 牧野仁美

I. はじめに

当院救命救急センター病棟（以下救急病棟と略す）の看護提供方式は開設当初は完全受持ち制だったが、スタッフの教育に有効で当病棟に適した機能別併用型チームナーシング（以下機能別方式と略す）へ変更し、長期間施行してきた。しかし、年々一人の患者の全体像が把握しにくい、勤務交替後に他病棟と看護提供方式が異なるため戸惑いがある、看護の満足感が得られにくいというナースが増加した。そこで、当院のほとんどの病棟で行われている受持ち方式に変更した。変更後、現時点での評価と改善点を明確にする必要があると感じたため、この取り組みを行った。

II. 研究目的

救急病棟における看護提供方式変更後のナースの意識調査から現状の評価と今後の改善点を見出す。

III. 研究方法

救急病棟勤務ナース27名を対象に独自の質問紙を配布。質問紙の内容としては、患者の看護についてとナース自身についての2項目に分けた。対象者の中には以前の機能別方式の経験者と未経験者が混在しているため、経験からくる違いを考慮し、2グループに分けて分析した。

IV. 結果・考察

受持ち方式の継続希望について2グループに大きな差はなく、全体の85%を占めていた。これ以外の質問においても受持ち方式が良いとする結果が多数を占めた。そして、①受持ち方式導入後、患者をトータル的に把握できた上で看護の提供がしやすくなったこと②私の患者という意識が働き、積極的な看護が行いやすくなったこと③患者の看護への責任感・満足感・やりがいが機能別方式に比べ、増したと感じられていることが分かった。これに対し、受持ち患者以外の患者把握・経験の差により提供する看護に差が生じる・受持ち患者以外の患者への看護に不安が生じるという点では機能別方式の方が良いという結果が出た。これらの結果から、今後も受持ち方式をより効果的に継続していくためには、個人の能力差による看護の差や個人の不安感の解消を図っていくことが必要だと分かった。

V. おわりに

今回の結果から、変更によって改善された点と今後の課題が明確になった。今後はチーム内の情報の共有化・コミュニケーション不足の解消を図り、また勤務交替者のサポート方法の検討を行いながら受持ち方式を有効的に継続させていきたい。